

徳とく泉くゐん寺じ報ほう

No.0033

発行
令和2年7月
発行元 徳 泉 寺
仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3
(022)297-4248
tokusenzi.sendai
@gmail.com

「報告

公開同朋会開催

七月十一日（土）十三時より公開同朋会を開催しました。新型コロナウイルス感染症予防のため、三月から開催を自粛していた同朋会（聞法会）。毎年七月は公開ということでも広くご門徒の皆さんに参加を呼び掛けておりましたが、緊急事態宣言の解除を受けて、衛生面の配慮をしながら、普段より縮小した形で開催しました。

五か月ぶりの法話に住職も前住職も緊張を隠せませんでしたが、温かいご門徒の皆さんに見守られ、ここが自分にとつての聞法の間であることと再確認させられました。マスクをしての勤行や法話は大変ですが、それでも皆さんと直接お会いでき、言葉を交わす喜びは代えがたいものです。新しい生活様式の中でも、皆様との関わりを最優先にできる方法を慎重に探っていきたいと思えます。



住職法話「日常」と「無常」——コロナ禍の今を生きる——

お寺は生きることと死んでいくことをずっと尋ねてきましたが、「疫病を生きる」というような、こんな生活になるとは、半年前まで予想もしていませんでした。こうなつて思い出されるのは東日本大震災のことです。あの時には、「日常」＝（イコール）「今日と同じ日が続くこと」だと考えていて、へこんでしまった日常をなんとか元の状態に戻したい、と考えていました。しかし、そうではなかったのです。視点を変えてみれば、へこんでしまった日常の中「ここ」に、私たちの「いま」があります。

仏教の教えに「無常」ということがあります。「常ならず」変化して定まることがないということです。へこんで日常に思いを馳せ続けるのではなく「いま」私が生きている「ここ」がかけがえのない生きる場所だと実感し関わりの中でわが身を生きるこそ大切なのではないのでしょうか。

前住職法話 「真宗の教え」について（一部抜粋）

宗教とは宗（むね）となる教え、拠り所となる教えのことです。私たちは苦しみは外からやってくると思いがちですが「苦しむ私」という視点から私の内に目を向けていき、私たちが苦しめている苦の根源に目覚めることをもって、苦を超えていこうという内道の教えが仏教です。お釈迦様は「人生は苦なり（一切皆苦）」とおっしゃいました。私たちは都合のいいことが好きで都合の悪いことは嫌い、自己への執着心でいっぱい自我を生きています。この苦しみから逃げようとする私の内に目をむけて、自我のため見えなくなつてしまつている本当の自分に出会つてほしい、本当の私に気づいて本当の私を生き切つてほしい、そう私に願いをかけて呼びかけておられるのが阿弥陀仏です。阿弥陀仏からの呼びかけによって「自我いっばいの私だったなあ」と気づかされた時、自然に頭が下がり素直にありのままの自分を生きられるようになるのです。この呼びかけに応える私の目覚めを「信心」というのです。